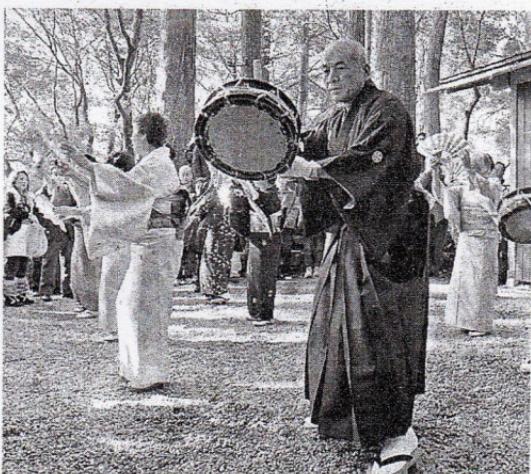


# やまと 民俗への招待

初めて奥吉野の篠原踊りを見たのは1979(昭和54)年1月25日だった。急斜面に立地した集落から、さらに山の頂にある天神社のわざかな平地で踊りは行われた。紋付き袴姿の男性が太鼓を打ち、着物姿の女性が扇を握りながら踊るゆつたりとした美しい踊りだった。

社前では「梅の古木踊り」「宝踊り」「世の中踊り」3曲が奉納されたが、「世の中踊り」の一節に、えたいの知れない強い感銘を覚えた。その時の音頭取りは和泉安恭さんで、長く引いた低い声で「世の中をゆりや直す」と歌った。3曲は長生きと富と世の安泰を願うものだが、「世界を揺り動かしてでも良い世を」という直截的な表現に驚いた。この歌詞に近い言葉を感じ取ったのだ。



雪のため今年は中止となった篠原踊り=五條市大塔町で2015年1月25日、筆者撮影

世末の「世直し」の雰囲気を感じ取ったのが、「振り直す」といふ言葉は地震と結び付いている。仮名草子『かなめいし』には、1662(寛文2)年の京都の大地震を「初めの24(文政7)年の元旦に起きた地震の際に、「世の中をゆり直すらん白の始」(文政句帖)と詠んでいる。しかし、ひけれども、大ほどハ世なをし世なをしといひけれども、大地震で世の中を正当なものに振り直すという

て、うじきふるふ事おびたし」と描写している。地震が起ると「世直し」と唱える呪いがあったのだ。

「世直し」という言葉は、18世紀後半から一般に使われ出したという。小林一茶も1824(文政7)年の元旦に起きた地震の際に、「世の中をゆり直すらん白の始」(文政句帖)と詠んでいる。地震で世の中を正当なものに振り直すという

# 災害転じて変革願う

(奈良民俗文化研究所  
代表・鹿谷勲)

考え方方が流布していたようだ。地震という過酷な災難が、世の中を作り直すことにつながって欲しい、いやそうあるべきだという変革を願う庶民の潜在意識、究極の困難のなかでも明るい未来を願う発想がそこにはある。

篠原踊りは、近世初

頭の小歌踊りの風格を伝えると言われているが、併せてその後のこうした世直しを願う時代の息吹をも今の私たちに伝えている。